

3 . 医療ミス

次の文章は、渡辺淳一の小説「麻醉」の終末の部分です。この文章を読んで、「医療ミス」について、あなたの考えることを論じなさい。字数制限 1,200 字（または 800 字）

「大袈裟かもしれませんが、今度のことで、少し人生観が変わりました」

野中医師は冬陽のなかで身を竦めた。

「正直いって、いままでは医師としての自分とか、科学を過信しているようなところがありました。でも今度のことで、医者というよりも、わたし自身があてにならないことがよくわかりました」

両手をポケットにつっこんだ野中医師の影が、手前の白茶けた径をこえて、墓石の端まで延びている。短い冬の陽はすでに傾きはじめているようである。

高伸はその動かぬ影を見ながら、いまの医師の言葉を反芻する。

自分自身があてにならない、わかりきったことを守れない、その些細なことのために大事を引き起こしてしまった。

野中医師の言葉をききながら、高伸は次第に、自分のことをいわれているような気がして目を伏せた。

まさしくあのときも、起きるわけがないと思っていたことが起きてしまった。

四ヶ月前、サンシャインホテルに納入するアメニティーグッズのなかみを間違えて大騒ぎになった。幸い、間一髪、発見が早くて、損害を最小限に食い止めることができたが、あれがあと一日でも遅かったら、取り返しのつかぬことになっていた。この信じられぬミスの原因も、指示書をいま一度たしかめるといふ、簡単で易しい作業を怠ったからである。

むろん、人の命を預かる医学と、アメニティーグッズと、同じに論じることはできない。一方はシャンプーとリンスの問題だが、こちらは人の命に直接関わることだけに、慎重な上にも慎重に対処すべきである。

だが重要度が違うとはいえ、原因となったものは、いずれも驚くほどよく似ている。

幸い、高伸は発見が早くてなんとか立場を保てたが、もし高伸が医師だったとしたら、同じミスを犯し患者の家族に迫られていたかもしれない。

いかに医学は人の命に関わるといったところで、人間である以上、ミスを犯さないとはいいきれない。

考えてみると、野中医師の「知りすぎていたから……」というつぶやきは、高伸を含めて、あらゆる人々への警告ともききとれる。

なまじっかよく知っていて、自信があったからこそミスをしでかした。麻醉という医学の最先端での事故が、技術のミスや器機の欠陥でなく、わずかな不注意という、人災から生じたところが辛すぎる。そのために健康だった一人の命が無残に切り捨てられ、家族のすべてが悲しみに浸る。その大事が、とるに足らない些細すぎることから生じたということが、切なくて悲しすぎる。

高伸はふと、肌寒さを覚えて、コートの襟をすぼめた。なお冬の陽は明るい、足元から冷気がしのびこんでくるようである。

いま、野中医師からすべての話をきいて、高伸はある安らぎと同時に、とらえどころのない虚しさを覚えていた。安らぎは、野中医師がすべて正直に語ってくれたことへの納得であり、虚しさは、些細な不注意から、妻の命まで奪われたことへの口惜しさである。

「どんなにすすんでも、こういうことはあるのですね」

高伸がつぶやくと、野中医師が再び頭をさげる。

「本当に、申し訳なくて……」

「いや、そういうことではなく……」

高伸が聞いたかったのは、一人の医師の過失や責任の問題ではなく、科学や技術がどれほどすすんで

も、それを扱うのは人間であり、人間が扱う以上、思いもしない事故がおきる可能性がないといいきれない。そのことへの切なさ、口惜しさである。

【解答例】

1. 字数制限 1,200 字

人間は、完全な存在ではない。当然ながらミスをするのである。だが、そのミスは、許容される場合と絶対に許されない場合とがある。人命に関わる医療事故は、取り返しがつかないが故に絶対にミスがあってはならない。

しかし、現実には、医療事故は完全には無くすることができない。多くの医療事故は、医療従事者個人の些細なふとした不注意から起きていることが多い。

某大学病院で起きた手術室に入る患者を取り違えた事件は、記憶に新しい。心臓疾患と肺疾患という異なる手術を同時時間帯に受ける二人の患者の取り違えが手術後に判明したものである。

事故の原因は、手術室に搬送した看護師や執刀した医師による患者の確認が不十分であった点にあるという。一人の患者は難聴だったようだ。不幸な偶然が重なった事故とも思えるが、看護師や医師が、患者さんの難聴を的確に把握していれば防げたかもしれない。こうした医療者側の配慮不足やうっかりとしたミスが医療事故につながる。

医療事故を誘発する主な理由として考えられるのが、医師や看護師が患者の氏名や処置内容、投与する薬品名などを間違えたことで事故につながったケースは少なくない。いわばうっかりミスや些細な不注意が原因だ。では、なぜこのような事故が頻繁に起きるのか。

本文にも記されているように、ベテランのルーチン化した業務に対する慣れの意識から生じたうっかりミスや、反対に新人が経験不足によって起こすミスもある。また、医療従事者が肉体的あるいは精神的な疲労で業務に携わり、起きた可能性もある。不規則な勤務体制に加え、仕事上のストレスもあいまって、ミスが生じるのである。過剰労働によって誘発されるミスはベテラン・新人の別なく起こりうるだけに、真っ先に解決したい問題である。

過剰労働を解消するためには、労働環境の改善が必要である。医療従事者の健康状態を配慮した勤務シフトの導入や、スタッフの人員増を図るべきだ。さらに、高度化した医療においては多様な医療機器の操作法や最新の医薬品に関する知識の習得が不可欠である。そうした医療行為に直接関わる技術や知識の習得を目的とした院内研修制度の拡充も必要だろう。

しかし、科学がどれだけ進み、医療の最先端でいかに精緻なテクニックが開発されたとしてもそれを操るのは、不注意で誤り多き人間である。悲しいけれどもそれが現実だ。医療事故の問題はどこまで科学が進歩しても、永遠に残る課題である。それゆえ、万一、ミスを行っても、二重・三重のチェック機能を働かせることで深刻な事故を抑止できる危機管理システムの構築も重要課題である。人間はだれでもミスをする可能性があることを前提に、たとえ軽微なミスでも見逃さずに失敗要因を取り除き、常に安全が維持されるシステムを作ることが大事である。(1,144 字)

2. 字数制限 800 字 第2・3・4段落の具体例を削除し、余分な修飾語を削除して調整する。

人間は、完全な存在ではない。当然ながらミスをするのである。だが、そのミスは、許容される場合と絶対に許されない場合とがある。人命に関わる医療事故は、取り返しがつかないが故に絶対にミスがあってはならない。

しかし、現実には、医療事故は完全には無くすることができない。では、なぜ医療事故が頻繁に起きるのか。

本文にも記されているように、ベテランのルーチン化した業務に対する慣れの意識から生じたうっかりミスや、反対に新人が経験不足によって起こすミスもある。また、医療従事者が疲労で業務に携わり、起きた可能性もある。不規則な勤務体制に加え、仕事上のストレスもあいまって、ミスが生じるのである。過剰労働によって誘発されるミスはベテラン・新人の別なく事故が起こりうるだけに、真っ先に解決したい問題である。

過剰労働を解消するためには、労働環境の改善が必要である。医療従事者の健康状態を配慮した勤務シフトの導入や、スタッフの人員増を図るべきだ。さらに、高度化した医療においては多様な医療機器の操作法や最新の医薬品に関する知識の習得が不可欠である。そうした医療行為に直接関わる技術や知識の習得を目的とした院内研修制度の拡充も必要だろう。

しかし、科学がどれだけ進み、医療の最先端でいかに精緻なテクニックが開発されたとしてもそれを操るのは、不注意で誤り多き人間である。悲しいけれどもそれが現実だ。医療事故の問題はどこまで科学が進歩しても、永遠に残る課題である。それゆえ、万一ミスを犯しても、二重・三重のチェック機能を働かせることで深刻な事故を抑止できる危機管理システムの構築も重要課題である。人間はだれでもミスを犯す可能性があることを前提に、たとえ軽微なミスでも見逃さずに失敗要因を取り除き、常に安全が維持されるシステムを作ることが大事である。(757字)

【解説】

出典は、渡辺淳一著、「麻酔」1992年朝日新聞朝刊に連載された小説である。

主題は、人間は完全な存在ではない。それゆえ思いもかけない過失を犯す。それが医療現場で起きると人命にかかわる大事に至る。人間というものがこうした存在であるということを認識し、その上で過失をいかに防ぐか、事故にどう対応するかということをつめた名作である。

医療事故や医療過誤が、相次いで報道されている。と同時に、看護医療系の入学試験の小論文や面接試験で「医療事故」をテーマに問われる問題が多く見られるようになった。

出題側の意図としては、これから医療従事者を目指す医療の当事者として、社会現象の一つとしてではなく自分が直接関わっていく問題であるのだという積極的な姿勢を求めているのである。

看護医療系の小論文の取り組み方として、どんな課題に対しても一般論ではなく、自分がいかに関わるか、自分ならどのように取り組むかという視点で臨むことが大切である。

一般的に、医療事故の原因として課題文のように「医療従事者の人為的ミス」が挙げられるが、その一方で「高度に進歩した医療技術を使いこなせていない」という側面があることも忘れてはならない。この二点を踏まえた上で、医療現場で自分がいかに取り組むかという観点から論じた。

しかし、医療現場に立っていない受験生にとっては、「医療事故」という課題は難題である。

人間は完全な存在ではない。時として思いもかけない過失を犯す。この悲しい現実を、どのように防御すべきかという課題のテーマに対し、人為的ミスを防ぐために自分ができること、これから医療者を志す上での心構えを論じてみたい。もちろん、既に医療の現場に立っている受験生は、具体例を挙げて論じていけば説得力が増すであろう。

なお、課題文は小説であるが、主人公の被害者への同情的な感想文にならないように気をつけたい。